

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：34314

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885101

研究課題名(和文)日本における予防接種の歴史社会学的研究

研究課題名(英文)Historical sociology of vaccination in Japan

研究代表者

香西 豊子(Kozai, Toyoko)

佛教大学・社会学部・講師

研究者番号：30507819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本における予防接種のあり方を歴史社会学的に検証し、予防接種が各時代においていかに実践されていたか実態を解明するとともに、その予防接種の実践が帯びていた政治性を析出した。具体的には、(1)近世後期における天然痘の流行とその対処法、(2)近世後期における種痘の実践をめぐる議論の全容、(3)明治期から戦後にかけての種痘の実施状況を、それぞれ分析・解明した。

研究成果の概要(英文)：This research, through a historical-sociological lens, examines different ways of vaccination in Japan, elucidates how vaccination was performed through the ages, and thereby tries to separate the political significance of vaccination from its practice. Specifically, the analysis explores (1) the smallpox epidemics during the latter half of the early modern period and (2) the discourse surrounding the inoculation/vaccination practice during the latter half of the early modern period, as well as (3) the enforcement of vaccination from the Meiji-Period to the end of the Second World War.

研究分野：医療社会学

キーワード：予防接種 歴史社会学 天然痘 種痘

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

予防接種は現在、感染症に対する有効な対処法の一つとして一般化している。当初は天然痘(歴史上もっとも多くの人々の死因となった感染症)に対する予防法として実用化され、およそ2世紀のちの1980年には、その天然痘を自然界から根絶したという実績をもつ医療である。そうした背景を受けて、国内外いずれの研究においても、予防接種に関する歴史記述は、多くは予防接種の功績を称揚する「天然痘根絶史」の様相を帯びている。

しかし、本研究の見るところ、予防接種という医療は、当初から人類にとって福音としてばかりあったわけではない。日本では近世後期から明治期にかけ、身体をその内側から、人体の免疫システムにまで介入して強制的に改変する技法として登場していた。これは、従来の公衆衛生研究の中で完全に見落とされていた点である。そこで本研究は、天然痘を事例に、実用化から今日に至るまでの予防接種の存立様態を歴史社会的に検証し、予防接種という医療が当該社会において帯びていた意味合いを析出することで、既存の研究蓄積を補完することを目指した。

(2) 先行研究業績の状況

本研究は、研究代表者の先行業績を引き継ぐものである。その端緒は、幕末に蝦夷島(現在の北海道)でおこなわれた日本初の強制的な種痘(天然痘に対する予防接種)を事例に予防接種の政治性を析出した論考である。時の為政者は、種痘を厭い山へと逃げ込む住民(アイヌ)を全て狩り出し、当時まだ国内でも実施例が少なく賛否も分かれていた種痘を断行したのだった。

日本における全体主義的な予防接種の歴史が、じつは幕末の「辺境」の地から始まっていたという事実は、日本の予防接種の歴史における近世後期から明治期にかけての時期の重要性を研究代表者に痛烈に認識させた。

その後の予備調査により、種痘をめぐる施策は、明治期になると予防接種全般へと拡大され、医療のみならず教育や軍事の制度とも密接に関連し合いながら近代日本の身体を規定していったことが判明した。国家や社会全体の存立を脅かすリスクが、個人の身体のリスクへと振り替えられていったわけである。

そこで、現代にまで続く予防的衛生のリスク問題が、歴史的に言えば、近世後期から明治期にかけての時期に胚胎していることを、学術上、明確にしておく必要があると判断し、先行研究業績(論文4編)を発展させるかたちで本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の背景から、日本における予防接種のあり方を歴史社会的に検証し、それが時代によって帯びていた意味合いと政治性とを明らかにすることにあった。この目的を達成するために、研究課題(日本における予防接種の歴史社会学的研究)を、以下の通り、具体的な4点のサブ課題に分節し、明らかにすべき対象を明確化した。とりわけ、予防接種の歴史のなかで転換点となる近世後期から明治にかけての時期については、サブ課題を2点配分し重点的に調査をすすめることとした。

(1) 近世後期における天然痘の流行とその対処法の説明:

日本史でいう近世後期は、疾病史上では、急性でかつ致死率の非常に高い感染症のグローバル化の影響が日本列島に達する時期にあたる。本研究ではまず、この時期の天然痘の流行とそれへの対処法を説明し、後の時代における急性感染症への対策をのちに分析する際の参照点に据えることとした。

(2) 近世後期における種痘施行に関する議論の全容説明:

日本の近世後期はまた、急性感染症が日本列島で流行すると同時に、西洋の近代医療がそれらへの対策として積極的に試みられ始める時期でもあった。種痘(天然痘に対する予防接種)もこのとき、ヨーロッパ由来のワクチンを用いて本格的に行われるようになる。その際、いかなる議論が起こったかを詳細に分析し(とりわけ、医学史の中では種痘に反対をした頑迷固陋な学統と位置付けられている、岩国出身の幕府の医官・池田氏の議論)、予防接種の今日的な問題の淵源を探ることを目指した。

(3) 明治期から戦後にかけての種痘の実施状況の説明:

明治期は、急性感染症のグローバル化の余波が本格的に日本列島に到達する時期である。このとき日本ではドイツを範にとった医療制度が構築され、種痘も国家の衛生政策の最優先事項として全国的かつ強制的に行われ始める。ただし、その実態についてはほとんど説明されておらず、日本列島の周辺諸地域の実態(軍事活動・移民・植民地経営などを通じて、種痘用ワクチンの製造・分配・接種制度が日本列島の周辺諸地域へと拡大適用されてゆく実態)と合わせて、調査・説明される必要があった。

(4) 天然痘の自然界からの根絶(1980年)前後における種痘に関する議論の全容説明と、それが現代の予防接種制度におよぼした影響の析出:

戦後になると天然痘の流行はほぼ抑制さ

れ、むしろ種痘により死亡・損傷される身体の数、天然痘への感染そのものによって死亡・損傷する身体の数を上回るという転倒現象がおきる。以降、天然痘を含む感染症の予防接種の強制は部分的に解除されてゆくが、天然痘が端緒をひらいた予防接種という医療そのものは、なおリスクというかたちで残存している(今日、身体は「自己責任」という名のもと、感染症に罹患するリスクと予防措置により損傷されるリスクの両方のあいだに投げ出されている。ここ数年の事例を見ても、勧奨接種と任意接種の間をゆれうごいた子宮頸がんワクチンの接種問題がその好例である)。こうした予防接種の現状とその意味合いとを、上記3点のサブ課題とともに歴史社会学的観点から総括し問い直すことを試みた。

3. 研究の方法

(1) 資料の調査・収集

本研究は、特定のジャンルにこだわらず、天然痘(痘瘡)とその対処法に関する資料を、時代ごとに可能な限り調査・収集し、読解・整理を行ったうえで、それらに言説分析を加えるという研究手法をとるものである。そのため、いずれのサブ課題においても、最初の段階において、資料の調査・整理・収集をおこない、分析対象の拡充をはかった。

サブ課題(1)・(2)に関しては、一般書籍や論文のほか、富士川文庫(京都大学)や杏雨書屋(武田科学振興財団)・国立国会図書館・東京大学総合図書館等が所蔵する古医書(医家らの随筆も含む)を、重要度の高いものから可能な限り多く複写・収集した。また、岩国(岩国徴古館)と福井(福井県立図書館・福井市立郷土歴史博物館)にて現地調査を行い、重要な資料は購入・複写した。

サブ課題(3)については、明治期以降に刊行され、かつ医師・研究者のあいだで種痘に関する主要な研究成果を発表する舞台となっていたジャーナル(『細菌学雑誌』・『日本衛生学雑誌』・『大日本私立衛生会雑誌』)を全点調査のうえ関連する論考を複写・収集することに加え、衛生学者・医師・研究者らがいよいよ論説を公表していた週報・月報(『東京医事新誌』・『医師会ニュース』など)に展開された種痘に関する論争についても関連項目を複写・収集した。

サブ課題(4)については、1970年代以降の、種痘の賛否をめぐる議論や種痘後副反応の報告を、種痘の教科書的な書籍や医学系の学会誌・裁判の記録などを調査した。また、種痘後脳炎等の事例は、近年になって裁判の記録や関係者の手記が多く出版されるようになったので、順次購入して分析に備えた。

(2) 資料の読解

いずれのサブ課題においても、調査・収集した資料は、ファイリング・配架する時点で再度通読し、クラスターごとに分類しなおし

た。また、古医書に関しては、書誌情報を書き取ったうえで、基本的には全冊(分量が多い場合は関連部分)通読するのと並行して翻刻し、のちの分析に備えた。

資料の翻刻・分類・整理がある程度すすみ、部分的に論文として切り出す段階に入ると、再度、該当資料を精読し、文中に引用する資料・箇所を取捨選択した。

(3) 資料の分析

本研究では、文字や図像にされたデータを、ジャンルを超えてひろく対象に据え、言説分析を行った。具体的には、サブ課題にそって読解した資料を、近世後期(サブ課題(1)・(2))、明治から戦後にかけて(サブ課題(3))、戦後から現代まで(サブ課題(4))の3期に分割し、期間ごとに個々の言説が編成される学術的・社会的・思想的背景をまずは暫定的に描き出した。そのうえで、各期に現れた言説個々の動向を、暫定的に定めた学術的・社会的・思想的背景(言説の編成基盤)を参照することで確定し、必要に応じては個々の言説と言説の編成基盤とを同時に見直し修正を加えていった。

4. 研究成果

(1) サブ課題(1)に関しては、一部を論文にした(下記〔図書〕の項目の)。近世後期においては、天然痘をめぐる言説は医療実践や医学思想にのみ関連して編成されていたわけではなく、今日でいうところの民俗・習俗や儀礼・宗教など、多岐にわたる編成基盤を擁していた。

この論文では、そうした人々の身体をめぐる知のあり方や天然痘流行の様態を概観するとともに、18世紀末より官立の医学館で天然痘を専門的に教授した池田家の学説の特性を析出することで、種痘が伝来する以前の天然痘に関する知と実践の様相を跡付けた。

(2) サブ課題(2)に関しては、論文を2編執筆した(下記〔雑誌論文〕の項目の)、および(下記〔図書〕の項目の)。近世後期に医家らのあいだに生じた、種痘をめぐる立場の違いは、明治期以降、社会の中で種痘の実施が一般化し種痘導入当時の論争が忘却されるとともに、種痘推進派=蘭学者・蘭方医、種痘反対派=漢方医の構図であったかのように、単純化して捉えられるようになる。そして、近世後期に種痘反対の論陣を張った池田家の議論や、実際の種痘の普及活動において中心的な役割を担った漢蘭折衷派の言説は、日本医学史の通史的な記述からは完全にこぼれ落ちることとなった。

上記の2論文においては、大正初期に、歴史的に不可視化されたその池田家の事績や漢蘭折衷派の言説を掘り起こそうとした、森鷗外の「史伝もの」の記述を参照しつつ、近世後期の種痘の導入期の議論の全容解明を目指した。

(3) サブ課題(3)については、先行研究や当時の主要な医療系ジャーナル・週報・月報の読解・分析をすすめてゆくうちに、日本列島における種痘の実施・普及が、単に日本列島(おそびその周辺諸地域)に限定された問題ではなく、たとえば、種痘に用いるワクチン(痘苗)の製造に関してだけでも、ドイツ・オランダならびに朝鮮半島にわたって展開されていたこと、またその際、国家の打ち出す衛生政策が「民族」や習俗・各家庭の経済状況などの種々の障壁に直面していたこと、日本医学史の通史的な記述においては1970年代になってはじめて表面化するとされる「種痘禍」の問題がすでに明治期より医学という閉鎖的な言説空間においてはしばしば論題となっていたこと等が判明した。

そこで、このサブ課題のみを一つの研究課題として切りだし、新たに研究計画のもとで継続的に探求してゆくこととした(2015年度科学研究費助成事業:基盤(C)「近現代日本における予防接種の展開とそれをめぐる議論の歴史社会学的研究」)。

(4) サブ課題(4)に関しては、社会学のリスク論を理論的な支柱とし、近年しばしば議論になった子宮頸がんワクチンの接種問題に至るまでの、日本における予防接種の展開の意味合いを暫定的に総括した。

すなわち、天然痘に対する予防接種として、最初に実用化され成功を収めた(自然界からは根絶)種痘は、それ自体が非常に特殊な条件のなかで効果を発揮するものであったにもかかわらず、予防接種全般がさも感染症対策に対する有効な手段であるかのような認識を、人々にあたえ、医療制度のなかにも書き込んだ。そのため、種痘以降、つぎつぎと研究・開発・実施された予防接種は、個々の有効性・必要性を十全に議論されることなく、副反応をはじめとする諸問題が表面化するまで慣性的に実施される傾向にある。

そもそも、予防接種は、日本においては近世後期に実践され始めたある種の信憑の形式であるが(予防接種の効果判定はいまなお不明であり、予防接種を受けなかった場合の社会実験が不可能な以上、その効果判定の方法論が原理的に実証不能)、その信憑の内実については、今後の反省的な議論に参照点を提供するためにも、医療実践の外の立場から厳密に記述されておく必要がある。

なお、上記の通り、サブ課題(3)が当初想定していた以上に複雑でかつさらなる資料の収集・読解・分析を必要するものであったため、これよりそこで挙がる成果を待つことにはなるが、本研究の成果は、今後の3年計画で書籍にまとめ刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

香西豊子、京水補遺——鷗外の生きた湮滅の医学思想、思想、査読無、1090号、2015年、53-73頁

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

香西豊子、ミネルヴァ書房、歴史と向きあう社会学、2015年(刊行予定)、61-79頁

香西豊子、人文書院、「マニュアル」の社会史 身体・環境・技術、2014年、68-89頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

香西 豊子 (Kozai Toyoko)

佛教大学・社会学部・講師

研究者番号: 30507819

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: